SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

ピューリタン・ジェントリ論の射程

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学人文学部 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩井, 淳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000399

ピューリタン・ジェントリ論の射程

岩井　淳

一　はじめに
二　ピューリタン・ジェントリの形成
三　ピューリタン・ジェントリの思想
四　ピューリタン・ジェントリの役割
五　おわりに

一　はじめに

本稿は、ピューリタニズムを受容したジェントリ層が、初期ステュアート期からピューリタン革命期において、どのようにして形成され、どのような役割を果たしたのかを考察することを目的としている。しかし、この「ピューリタン・ジェ

ントリ」に焦点を定めることは、研究史上、どのような意味があるのだろうか。換言すれば、「ピューリタン・ジェントリ」論は、どれほどの射程距離をもつ議論なのだろうか。

従来の研究では、ピューリタニズムを受容したのがヨーマンで、アングリカニズム（イングランド国教会）を受容したのがジェントリという組合せを行ない、この二分法を採用することが圧倒的に多かった。この傾向は、日本の研究において特に顕著であり、イギリス近代化の担い手をヨーマンに求めるか、ジェントルマンに求めるかという相違はあるものの、この二分法自体は基本的に継承されていった。

ピューリタニズムとヨーマンの組合せを重視したのは、大塚久雄氏である。大塚氏は、M・ウェーバーが「経済的発展の進んでいた国々の人々、しかも、のちに見るように、その内部でもとくに当時経済生活において興隆しつつあった市民的中産階級がピュウリタニズムの、かつてその比をみないほどの専制的支配を受け入れたのは、いったいなぜだったのか」[1]と述べたことに依拠しつつ、近代化の担い手としての「中産的生産者層」やヨーマンの役割を強調したのである。[2] この見解は、いわゆる「大塚史学」と言われる研究者によって広く支持されることが多く、最近では、今関恒夫氏や梅津順一氏、常行敏夫氏の各著作[3]に至るまで、有力な潮流となっている。

他方で、アングリカニズムや「ジェントルマン・イデアール」と、ジェントルマンの組合せに力点を置いたのは、越智武臣氏である。越智氏は、人文主義の影響を受けたジェントルマンの思想を「ジェントルマン・イデアール」と規定して、「近代英国のトレーガーが、……ヨーマンリーと呼ばれた実体の自己運動のなかにあるのではなくて、むしろジェントリーと呼ばれた一見得体の知れぬもののなかにある」[4]ということを強調した。この見解は、「大塚史学」に批判的な「再検討派」[5]と言われる研究者たちによって幅広く受け入れられ、現在に至るまで、もう一方の有力学説のキー概念となっている。そのなかで、岸田紀氏は「アングリカニズムは……ステュアート絶対王政とジェントルマン支配に積極的に宗教的意義を与

えた[6]」として、アングリカニズムとジェントリの結び付きにアクセントをおいて、イギリス近世史を概観している。

このように日本のイギリス史研究では、近代化の担い手をヨーマンなどの「中産的生産者層」に求めるか、ジェントリに求めるのかが一大焦点となってきた。だが、奇妙なことに、その前提となる、ピューリタニズムとヨーマン、アングリカニズムとジェントリという二分法そのものは根底的に疑われることなく、ほぼ維持されている。その結果、この区分法に合わない「ピューリタン・ジェントリ」という重要な階層が、研究者の問題意識から抜け落ち、等閑に付されたのである。同時に、この二分法は、最近、欧米で提起されている「草の根のアングリカニズム」という発想[7]にもなじまず、その理解をさまたげ、日本での受容を困難にしているように思われる（図1を参照）。

けれども、初期ステュアート期からピューリタン革命期の歴史を考えるにあたって、ピューリタン・ジェントリは、不可欠の役割を果たした看過できない階層であった。その点は、革命の立役者となったオリヴァ・クロムウェルが、ピューリタン・ジェントリの代表的な人物であったことを思い起こすだけで、十分納得できるはずであろう[8]。

ここで欧米の研究動向に目を転じるならば、経済史や思想史の分野では、ピューリタニズムの担い手は、クリストファ・ヒルを筆頭にして、ヨーマンなどの「勤勉な種類の人々（the industrious sort of people）」に求められることが多かった[9]。だが一九五〇年代の「ジェントリ論争」以後、一七世紀の地方史研究が着実な成果をあげ、ピューリタン・ジェントリを含むジェントリ層の実態を明らかにしていることは注目に値する。それは、一九六〇年代以降、A・エヴェリットらの「レスター学派」によって主として進められ、各州レヴェルで実証的な研究が深められたが、総じて言うと、大ジェントリ支配の強固さと保守性を指摘するものが多かった[10]。

しかし、近年では、各州ごとの多様性を前提にしながら、C・ホームズやA・ヒューズ、J・アールズらが州レヴェルでのエリート層の分裂や対立の構図を提示している[11]。そうした諸成果に並んで、一九八四年からJ・T・クリフは「ピューリタ

ン・ジェントリ」論を提唱したのである。[12] 本稿でも、クリフを初めとする諸研究に学びながら、ピューリタン・ジェントリの思想と行動を解き明かすことになろう。

一方、日本でも、少数ながら、革命史研究やウェーバー研究からピューリタン・ジェントリに注目するものが出現している。革命史研究では、今井宏氏が「国教会批判のイデオロギーたるピューリタニズムが次第に『地方』に定着しはじめ、その戦闘性を高めていく」[13]と述べて、ピューリタン的なジェントリの意義を評価している。ただし、今井氏の場合、「宮廷」対「地方」という構図のなかで、ピューリタン・ジェントリは「地方」を代表する勢力として描かれており、この階層がもっていた国際的な視野やこの階層の国際的な位置付けには、ほとんど論及されていない。

また、ウェーバー研究の側では、実証的なものではないが、野田宣雄氏や田中豊治氏から貴重な発言がなされている。その趣旨は、ウェーバー自身も『支配の社会学』や『政治論集』においてピューリタン・ジェントリの役割を的確に見抜いていたというものであるが、野田氏の次の指摘などは、歴史学者も耳を傾けるべき指針となるだろう。「『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』のなかではジェントルマン型とピューリタン型との拮抗関係が説かれていたが、両者は長らく対立しあうと同時にまた同化・融合もとげ、ピューリタン的ジェントルマンなる変種さえ生み出したのであった。こうしたことは、ジェントルマンの精神的影響が国民の下層にまで及んでいたこととともに、このイギリスのエリート層が国民から遊離した存在ではけっしてなく、国民大衆との間につねに活発な精神的交互作用を及ぼしあっていたことを物語っているだろう」[14]。

そこで本稿では、第一に、ピューリタン・ジェントリの形成過程を考察し、第二に、ピューリタン・ジェントリの思想を分析することによって、革命に向かう歴史の中で、この階層がもった意義を解明したい。それによって、欧米の研究動向と日本の研究状況の間に存在する落差を少しでも埋めることができればと思う。なお、本稿では、特定の州に即してで

はなく、イングランドの中部から東部にかけてのピューリタン・ジェントリを主として扱いながら議論を進めることにしたい。

第三の課題は、ピューリタン・ジェントリの役割を考えるにあたって、国際関係が不可欠の要素を提供していた点を明らかにすることである。例えば、ジェントリ層の多くは、三十年戦争を初めとする同時代のヨーロッパの状況に敏感に反応しており、また迫害が強化された一六三〇年代に「ピューリタン・ジェントリ」は、協力して新大陸への入植事業を推進していたのである。そして最後に、宗教と階層を重ね合わせる従来の二分法に代わって、初期ステュアート期から革命期の宗教と階層の関連を、どのように把握すべきかについて、若干の提言を行なうこととする（図2を参照）。

二　ピューリタン・ジェントリの形成

まず初めに、「ジェントリ」や「ジェントルマン」と呼ばれる階層について概観しておこう。A・G・エイルマーが算定した表によると(図3を参照)、チャールズ一世治下の一六三三年におけるイングランドの支配階層は、次のような六グループから構成されていた。その家族数と平均年収を示すならば、貴族が一二三家族(平均年収は約六〇〇〇ポンド)、主教が二六家族(平均年収は約九五〇ポンド)、イングランド貴族の長男、スコットランドとアイルランドで貴族になったイングランド人、および準男爵を合計すると三〇五～三一〇家族（平均年収は約一五〇〇ポンド）であった。貴族は、貴族院議員の資格をもち、また枢密院の構成員に任命されるなどして「宮廷」の重要メンバーになることが多かった。

残りの三グループは、総称して「ジェントリ」と呼ばれる階層であった。それは、ナイト（Sirの称号をもつ大ジェントリ）が一五〇〇～一八〇〇家族（平均年収は約八〇〇ポンド）、エスクワイア（比較的大規模なジェントリ）が七〇〇～九

〇〇〇家族（平均年収は約五〇〇ポンド）、狭義のジェントルマン（小ジェントリとも呼ばれる）が一〇〇〇〇～一四〇〇〇家族（平均年収は約一五〇ポンド）であった。彼らは、通常、地方の有力者であり、地方行政の要職をつとめたり、庶民院議員に選出されることが多かった。なお、本稿では、一六一一年に創設された新貴族位「準男爵（Baronet）」については、その年収や経営規模、生活様式などが「ジェントリ」に近いことから、これを「ジェントリ」階層に含めて、議論を進めることにしたい。

一七世紀前半のイングランドにおける支配階層は、以上の六グループによって構成されていた。彼らの全体は、残りの諸階層から区別されて、広義の「ジェントルマン」と呼ばれることもある（図1を参照）。その数は、当時のイングランドとウェールズの人口約四五〇万人のうち、わずか二％にすぎず、家族メンバーを加えた数でも五％に満たないものであった。しかし、彼らの政治的・経済的・社会的・宗教的な影響力は、他の中流層や下層の人々と比べて、圧倒的なものであった。[15]

ジェントリ層の多くは、一六世紀の宗教改革によって解散した修道院の領地を入手するなどして、経済的に実力をつけて興隆してきた。この点について、一六四一年にノーサンプトンシャの様子を観察したある人物は、次のような辛口のコメントを残している。

「ここでは貴族とジェントリの数が多くなりすぎた。今では、大変な数に増加している。特に、ジェイムズ王の即位以来そうである。……彼らは、教会の土地や財産を奪って興隆したのだ。そして、たいていは修道院とか、司教や教会からまきあげた建物などの中に居座っている。……こうしてたくさんのいかがわしい弁護士や新興ジェントルマンが生まれたのだ。……エリザベス時代には、一州に二、三人のナイトしかいなかった所に、現在では六〇人ものナイトがいるというようなことも、しばしば見かけることである。その他にも、エスクワイアとかジェントルマンとか自称する連中がたくさ

んいて、……贅沢な暮らしを送るくせに稼ぎは少なく、しかも身分不相応な生活をしている[16]」。

ここから読み取れるのは、中部地方のノーサンプトンシャでは「貴族とジェントリの数が多く」なっているが、わけても「ジェイムズ王の即位以来」、ナイトやエスクワイア、ジェントルマンといったジェントリ層の勢力が増しているということである。この観察は示唆に富むものであるが、すぐにイングランド全土に拡大され、一般化されることはできないだろう。なぜなら、イングランドの北部や西部、南部などでは古い家系の貴族やジェントリが依然として存続しており、「新興ジェントルマン」の数が相対的に少なかったことが知られているからである[17]。しかし、中部や東部地方では、上記のような「新興ジェントルマン」が多数出現した事実が確認されており、この地方が革命期には議会派の拠点になったことを考え合わせると興味深い（図4・図5の地図を参照）。

このように一七世紀前半のジェントリ層の多くは、古い家系であっても新興家系であっても、実力を有する注目すべき階層であった。この階層の宗教的特質は、どのようなものであったのだろうか。まず想起すべきことは、ジェントリの子弟の多くが、グラマー・スクールやパブリック・スクールでギリシア語やラテン語を学び、古典的な知識を修得して、法学院やオクスフォード、ケンブリッジ両大学などに進学したことである。この過程で彼らは、人文主義的な教養を身につけるのであり、その限りで「ジェントルマン・イデアール」論の主張は正しいものである。

しかし他方で、ジェントリの一部が、ピューリタニズムを受け入れることになったことにも注意する必要がある[18]。もちろんエリザベス期には、ピューリタンとアングリカンは宗教的に重なり合う部分が多く、教義的にも両者を区分することは困難であったが、初期ステュアート期には、血縁関係や派閥関係、また外交政策上の理由などから、すでに政治的に「ピューリタン」と呼ばれるジェントリや貴族が多数存在していた[19]。彼らやその周辺から、実際にピューリタニズムの信仰に踏み出す者が出現することになるが、ジェントリや貴族に教義を体系的に教え、宗教的に向上する機会を与えたのは、

何といってもピューリタン聖職者であった。

ジェントリとピューリタン聖職者の出会いの形は様々であったが、ここで特に注目されるのは、有力ジェントリの多くが、パトロンとしてピューリタン聖職者の保護者となったことである。[20] 当時、オクスフォード大学やケンブリッジ大学で聖職者の資格を得ながらも、実際に聖職禄にあずかれない者が多数いた。政治的・宗教的にピューリタニズムに関心をもつジェントリたちは、職につけないピューリタン聖職者たちを、彼らの意向の及ぶ教区牧師職に推挙したり、自分の私的な礼拝堂付きの牧師にかかえたりしたのである。この点について、国教会の大立者であるリチャード・バンクロフトと思われる人物は、次のような批判的コメントをよせている。

ピューリタン聖職者は「貴族やジェントルマンの懐に忍び込み……友人たちの力を笠に着て、出過ぎた行動をすることを常としている。……多くのジェントルマンが……この一派に加わり、その保護者になっている。……公的な発言をしたり、恭順を説いたりして……彼らの扇動的行動に反対する人は、狂人だとか……教皇主義者だとか……どっちつかずだとか言われてはずかしめられ、〔あるいは逮捕されて――引用者、以下同様〕裁判にかけられてしまう」。[21]

このように、「多くのジェントルマンが」ピューリタン聖職者の「保護者になっている」ことは、一六〇四年からカンタベリ大主教に就任したバンクロフトにとって、許されない出来事であった。その背景には、聖職者でなく俗人が牧師職への推挙権を握ると、高位聖職者が軽視される恐れがあり、それだけでなく、金銭で聖職禄が売買されるかもしれないという、国教会指導者にとって放置できない問題がひそんでいたのである。この点は、ピューリタン聖職者のパトロンとなるジェントリも、よく承知していた。ジェントリの側も、ただ受け身になって、誰でも推挙したのではなかった。サフォーク州のサイモンズ・デューズ（一六〇二～五〇年）は、一六二三年に「この人物をお認めになり、聖職禄をお与えくださるのなら、金貨二〇〇枚を思し召しに従って、お支払いします」という手紙を、ある教区牧師から受け取った。[22] これに対

してデューズは、ピューリタン・ジェントリとして知られるだけあって、毅然とした態度で次のように返答した。

「手紙を受け取るまでは貴下の親族の説教師にいくぶん心が傾きかけていましたが、手紙を拝見して、まったく嫌になりました。……貴下のような職業の方が、このような申し出をされるとは遺憾なことです。今日、良心的でないパトロンに不満が向けられていますが、それはこのような申し出をして正直なパトロンを堕落させてしまうかもしれない金銭ずくの聖職者にもっと向けられるべきだと思います。……これが聖職売買に当たることを、いまさら貴下に説明する必要もないでしょう。……このようなやり方では、正直な人間の推挙を受けることはできません[23]」。

こう述べたデューズは「金銭ずくの聖職者」を排除する一方で、敬虔なピューリタン聖職者に対しては、「良心的なパトロン」として積極的な援助を惜しまなかった。またピューリタンの側でも、バンクロフトとは逆の意見を述べる者がいた。聖職者であるヘンリ・バートンは、一六二四年の著作において、ジェントリがピューリタンのパトロンとなることは、間違っているどころか、むしろ優れたことであると力説した。

「真に寛大な貴族、そして真に高潔なジェントリは少なからず存在する。……彼らには聖職を売るという堕落した行為は、まったく見られない。……私の知る限りでは、多くのパトロンたちは、自分が推挙権を握る聖職禄の受領者がいなくなると、人に懇願されるのをじっと待っているのではなくて……自ら行動し、大学に使者を送り、もっともふさわしい人物を捜し回る。……こうやって慎重に求め、思慮深い方法で見いだした人物に進んで聖職禄を与えるのである。……こういう所にこそ、イングランドの世俗の信徒と聖職者の間にある、使徒行伝が言うところの、すばらしい競争心……父と子の競争心があるのだと思う[24]」。

バートンは「真に高潔なジェントリ」がパトロンとなることは、堕落どころか「イングランドの世俗の信徒と聖職者の間にある……すばらしい競争心」であると誇らしげに語っている。このように、一方で経済的に実力をつけてきた「高潔

なジェントリ」がいて、他方で職にあぶれ「良心的な」保護者を求めるピューリタン聖職者が存在していた。その両者が、一七世紀の初頭にパトロン関係によって盛んに結ばれたのである。この点に、ピューリタン・ジェントリの形成を考えるにあたって無視できない重要な特徴があるだろう。

三　ピューリタン・ジェントリの思想

前述したように、ピューリタン・ジェントリは、一七世紀初頭、わけても一六二〇年代になると広範に形成されていた。一六二〇年代は、財政問題や宗教問題を契機にして、ピューリタンや庶民院議員たちが、政府主流派の政策に不満をいだき、反対派に結集した時期でもあった。[25] 当然、ピューリタン聖職者やそのパトロンとなったピューリタン・ジェントリは、この状況を反映しながら、彼らの思想を展開していった。以下では、一六二〇年代以降のピューリタン・ジェントリたちが、聖職者の影響などによって、どのような思想を表明し、また時代状況に対してどのような対応を迫られたのかを検討してみたい。

ピューリタン・ジェントリは、聖職者から、著作や手紙、あるいは説教や日常的な接触などによって様々な影響を与えられた。例えば、ヘリフォードシャのピューリタン・ジェントリであるロバート・ハーリー（一五七九～一六五六年）は、一六三六年の春にピューリタン聖職者のトマス・ウィルソンから、次のような手紙を受け取っている。「私は、あなた自身がキリストと認められるかのように、あなたの家を教義と規律のための教会にすべきなどと、あなたに薦める必要はないと思います。……今や、邪悪な者の誤謬と世俗的な者の汚点を、有害なものとして遠ざけて、真理と聖なるものに従いなさい。キリストから生命を授かるために、信仰によって敬神の力をおもちなさい。[26]」

ハーリーは、このような宗教上の指針をしばしば与えられて、自らの思想を練り上げていったと思われる。そこで注目されるのは、「邪悪な者の誤謬と世俗的な者の汚点を、有害なものとして遠ざけ」るという指針である。ここには抽象的な「誤謬」と「汚点」ではなくて、歴史的で具体的なものが念頭に置かれていたはずである。その点は、サイモンズ・デューズの一六四五年の著作を読むと、生き生きと示されている。サフォーク州のデューズは、一六三〇年代の時代状況を回顧して、次のように述べた。「もしも冷酷で残虐な迫害が、敬神なる者の財貨や財産、自由、生命に対して行使され、実施されることがあり得なければ、神への礼拝にまとわり付く誤謬や異端、人の考案物、厄介な迷信が、また偶像や十字架、祭壇、聖餐台、聖遺物などへの人の屈従に存する偶像崇拝や神の被造物への崇拝が、一般的また公的に確立され得ることも決してないのである[27]」。

ここでデューズが指摘しているのは、政治的な「迫害」が「偶像崇拝や神の被造物への崇拝」といった宗教的特徴と不可分に結び付くということである。それは、一方で一六二九年の議会解散以来、強化されたチャールズ一世の専制政治を意味し、他方で一六二〇年代後半以降、ウィリアム・ロードを中心にして進められた国教会の改変を示すものであった。ロードは、一六二八年にロンドン主教に就任し、三三年には国教会の最高位であるカンタベリ大主教にまでのぼりつめて、ピューリタン弾圧を推進した人物である。一六三〇年代には、彼を中心にした聖職者のグループであるロード派が有力になった。ロード派は、国教会の礼拝や儀式を「偶像崇拝や神の被造物への崇拝」と言われるまでに改変して、カトリック教会への復帰を意図しているという疑惑を人々にいだかせたのである[28]。

それに対して、ピューリタンたちは、弾圧を逃れるために地下に潜伏したり、オランダやアメリカへの亡命を試みた。こうしたピューリタンを思想的に支えたものの一つが、千年王国論や終末論であった。千年王国論は、原始キリスト教の教義であったが、中世を通じての長い異端的時代をへて、一七世紀イングランドにおいて有力な教えとして復活した[29]。こ

の復活に寄与したのが、トマス・ブライトマンやジョゼフ・ミードといったピューリタン神学者たちであった。ブライトマンの主著『黙示録注解』（一六〇九年）とミードの主著『黙示録の鍵』（一六二七年、改訂版三二年）は、当初ラテン語版で出版されたが、一六一五年と一六四三年にそれぞれ英訳版が上梓されて、より多くの読者を獲得した。[30]

サイモンズ・デューズもまた、何らかのきっかけでブライトマンの思想を知り、おそらく彼の著作を読んだ一人であった。デューズは、一六二九年五月、「反キリスト」が打倒され、「キリストの王国」が到来する日を夢想して次のように記している。「反キリストの没落に続いて、神の教会に平和と統一をもたらす、もっとも栄光にあふれ勝ち誇った時がある。彼（ブライトマン）は、どんな昔から調べても、それまでせいぜい五〇年にすぎない（今から二〇年先である）とした。よりうれしいのは、人々がその時を享受するまで生きているだろうし、私たちが、真理への信仰の力において私たちの生命を喜んで捧げることによって、神の助力により間違いなく栄光にみちて、福音の真理を目撃することになるだろうということである。[31]」

このようにデューズは、明らかにブライトマンの影響を受けて、千年王国論を主張したのである。千年王国論的な発想は、なにもデューズだけの独占物ではなかった。ピューリタン・ジェントリであるロバート・ハーリーの婦人であるブリリアナ・ハーリー（一五九八？～一六四三年、図6を参照）も、この思想に親しんでいた一人であった。[32] 彼女は、一六三九年二月、息子に宛てた手紙のなかで「その日は切迫している」と語っている。「もしも私たちが、いつも祈るべき大義をもっているのなら、今こそ祈りの時です。主の栄光に満ちた御業が近いことは確実です。主は教会を純化しておられ、幸いにも、その日は黄金色に輝いて出現するでしょう。もしも邪悪な者たちが、恐れる理由をもっているのなら、今こそその時です。確実に主は、彼らを仕留めるために呼び寄せるでしょう。その日は切迫しているのです。[33]」

このように一六二〇年代以降、ピューリタン・ジェントリやその妻たちは、ピューリタン神学者や聖職者の影響を受け

ながら、千年王国論的な思想を表明したのである。彼らは、千年王国論によって、ロード派による迫害の嵐が吹き荒れた一六二〇年代末以降の時代状況を解釈した。状況は必ずしも彼らにとって有利ではなかった。しかし、「主の栄光に満ちた御業が近い」という確信は、厳しい時代を乗り越え、次の時代を予見するために、必要不可欠のものであったと考えられる。

そうなると、デューズによる一六三九年一二月の予見は、特別な重みをもって迫ってくるだろう。彼は、来るべき内戦をいち早く予想して、次のように述べた。「もし神が奇跡的にそれを防ぐことがないならば、悲惨な内戦（dismall and intestine warrs）の可能性は高いと思われる。私たちは、議会〔開催〕の保証を得ている。しかし、同時に船舶税が今、強制されていることは、あらゆる人々を驚かせ、公的な協議の好ましい結果など、私には全く期待できないのである[34]」。

このようなピューリタン・ジェントリの同時代認識は、決してイングランド一国に留まるものではなかった。例えば、ヘリフォードシャのピューリタン・ジェントリにとっても、海を越えたヨーロッパの情勢は大きな関心事であった。ロバート・ハーリーは、彼の家族とともに、一六三三年二月に「ドイツのプロテスタント君主間の統一に神の祝福があり、スウェーデン王位にふさわしい将軍が即位する[35]」ように祈っている。この祈りは、もちろん、一六一八年に始まった三十年戦争に参加するプロテスタント諸国に向けられたものであった。ハーリー家のように、彼らの視線が、同時代のヨーロッパにも注がれていたことを忘れてはならないだろう。

サイモンズ・デューズも、ヨーロッパ大陸に血のつながった兄弟をもっており、この兄弟との連帯を心掛けていたようだ。彼は、一六三九年一一月に、思いがけずサフォークの州知事（sheriff）に任命される。そのころ彼は、大陸にいる兄弟に向けて、来るべき「審判」に備えるように手紙を書いている。「サフォークの懺悔の年となる今年、私が有り難くない昇進を遂げたことに対しても、神は喜んで下さった。……スコットランドでの出来事すべてが狂気と騒乱への速度を速め

ているので、私たちは悲しくも悲惨な審判を受けることになるだろう。私たちにゆだねられた判断に対して神から指令をいただきたいという祈りの列に、加わりましょう[36]」。

デューズは、来るべき「審判」が間近に迫っていることを訴え、そのために結束する必要があることをヨーロッパ大陸に住む兄弟にまで説いている。ここで特筆すべきは、デューズが単にヨーロッパに関心をもつのみならず、終末論的な危機感のなかで、彼の連帯意識を表明したという点であろう。千年王国論のなかに国際的な視点が内包されている例は、何もデューズに限られてはいなかった。中部地方にあるラトランド州のピューリタン・ジェントリであるジェイムズ・ハリントン[37]（一六〇七～八〇年）は、一六四五年の著作において次のように宣言した。

福音は「東方で光り輝いて開始されたが、霊的なバビロンの雲をくぐり抜け、この滅亡の最終段階においてバビロン自身に突き刺さるだろう。また福音は、私たち西方の諸教会からインドに至るまでを栄光に満たしながら、同様の他の預言が、主とキリストの王国への地上の諸王国の従属・統合によって成就されるということを照らし出すだろう[38]」。

ハリントンにとっての「主とキリストの王国」は、イングランドに限定されるのではなく、「私たち西方の諸教会からインドに至る」ものであった。このように千年王国論は、一六二〇年代末以降の迫害の時代を克服する方向をピューリタン・ジェントリに示唆したのであった。それは、イングランド一国での克服策だけでなく、国際的な視野までも彼らに提供していった。ピューリタン・ジェントリたちは、地方の有力者として活躍していたが、同時に国際的な出来事にも敏感に反応する視点をもちあわせた階層であったと言えるだろう。この点は、彼らがアメリカ植民地への入植事業と積極的にかかわったことを指摘することによって、一層補強されるはずである。

四　ピューリタン・ジェントリの役割

従来のジェントリ研究は、この階層を「閉鎖的な一体性」という性格によって特徴づける傾向があった。[39] 次に掲げる、サフォーク州ジェントリの一体性を伝える史料などは、そうした性格を示すものとして、地方史家アラン・エヴェリットなどによって好んで用いられてきた。サフォーク州のジェントリであるロバート・レイスは、一六一八年ころの州の様子を、一体性に力点を置いて語っている。

「サフォークのジェントリは、しばしば会って、大変親しく話し合った。こうすることによって、彼らはお互いの善意を確かめ合ったばかりではなく、貧しい人々からも尊敬を集め、近隣の人々からも真の愛情を獲得することができた。だから、もし意見の食い違いが生じても、彼らの間の愛情と親切によって和らげられた大きな思慮分別のおかげで、こうした食い違いは、間もなく鎮められた。しかし、そういうこともほとんどなかった。彼らはまた、良い行ないについては、どんなことであれ一致するという宗教的にも気のあった連中であったので、一人が反対すれば、だれもが反対し、一人が賛成すれば、だれもが賛成するのであった[40]」。

たしかに、サフォーク州のみならず他地域のジェントリについても、一体的な性格を指摘することは可能である。しかし、この記述からジェントリたちが州内部で閉鎖的にまとまっていたと結論づけることは早計であろう。幾人かのピューリタン・ジェントリの足跡をたどるならば、そこに国際的で開放的な性格を発見でき、「閉鎖性」とは正反対の特色が浮かび上がるのである。しかも、ピューリタン・ジェントリを中心に進められた新大陸への入植事業などは多方面に広がる宗教的・政治的特徴を帯びており、決して「ジェントリの一体性」だけを前提にすることはできない。以下では、ピューリ

タン・ジェントリが行なった国際的な活動に見られる特色や彼らが果たした役割について具体的に検討してみたい。

まず最初に想起しなければならないのは、ジェントリたちが州のなかに閉じこもってばかりではなかったという周知の事実である。彼らは、近隣の貴族やジェントリと婚姻関係で結ばれたり、初夏を中心にした社交シーズンをロンドンで過ごしたり、庶民院議員としてウェストミンスターの議会に出席したりした。こうした州を越えた活動は、ジェントリのなかでも上層になればなるほど頻繁になるが、彼らの行動に付随する重要な側面であろう。

次に、一六二〇年代ころから、ピューリタン・ジェントリのなかには、新大陸の開拓に興味をもつ者が増加した。彼らは、ヨーロッパ情勢に関心を示すだけでなく、アメリカ植民地への入植事業にも携わり、実際に入植する者すら出現するようになった[41]。その背後には、前述したように、チャールズ一世とロード派による、ピューリタンへの弾圧政策があったことは言うまでもないだろう。ヘリフォードシャのジェントリであるロバート・ハーリーも、新大陸に関心をいだいた一人であった。彼は、ある人物からアメリカ行きを進められたが、結局、一六三四年にこれを断念した。その際、彼に渡航を奨励した人物は、ハーリーの決意が固いことを知って、次のように入植者の立場を弁明している。

「あなたのできることをしてくれるように、私はお願いするのであり、私たちは、祖国（our Native countrey）や友人たちを放置しようとは思っていない。またそれ以上に、私たちすべてが、大淫婦の破滅において役割を演じているヨーロッパという舞台のことを放置する気はない[42]」。

この弁明は、アメリカに渡航する者が「祖国や友人たちを放置」する気はなく、ましてや「ヨーロッパという舞台」についても執着心を示しているという点を伝えており、興味深い。アメリカからの視線がイングランドやヨーロッパに注がれたように、イングランドの地方に住むピューリタン・ジェントリの視線もまた、ヨーロッパやアメリカに向けられていた。ヨークシャのピューリタン・ジェントリ（正確には「ピューリタン準男爵」）であるマシュー・ボイントンは、アメリ

カへの入植事業に深くかかわった人物であった。彼はニューイングランドへの移住を決意して、一六三六年二月、植民地の総督となったジョン・ウィンスロップ宛に助言を求める手紙を書いている。

「私は、大家族を連れて行くでしょう。……私は、渡航までにどのようにして家を用意したらいいのか、あなたに忠告をお願いしたいのです。私の定住用の家がうまく準備できるまで、私は家族とともに、ここに留まるでしょう。加えて私は、家を作るのに、またここから送るのに、どのような荷物が、もっともふさわしいかについて、時々、あなたから助言をいただけるように願っています[43]」。

ボイントンの移住は、翌年、撤回されてしまうが、彼の決意が並々ならぬものであったことは伝わってくる。サイモンズ・デューズも、新大陸への入植を真剣に考えた一人であった。彼の自叙伝によれば、デューズは、「より高度の摂理により、私はキリストの御名と福音のために苦しむよう召し出されたのかもしれず、アメリカへの旅路が用意されているかもしれないと、長い間、熟慮[44]」したのであった。

結局、デューズはアメリカ行きを思い止まることになるが、それでも新大陸への関心を失うことはなく、入植事業に協力した。「プロヴィデンス・アイルランド会社」の経営にかかわるある人物は、デューズに援助を懇願して、一六三七年九月、次のように述べた。「もしもこの仕事に、あなたのような人物の援助が得られるならば、この仕事が（全能の神の支援によって）神の栄光と多くの人の慰めに役立つだろうことを私は疑いません。したがって、あなたや私たちに向けられた私の仕事は、この最悪かつ最後の堕落した時代のなかで私たちを唯一守ることのできる、安全を保障する力（the safe-keeping powere）に身を委ねるものなのです[45]」。

この一節は、アメリカ植民もまた「この最悪かつ最後の堕落した時代」を乗り越えるために、千年王国論的な信念によって建設されたことを物語っているだろう。以上のハーリー、ボイントン、デューズの事例は、いずれもアメリカ移住には

多大な決心を要したことを伝えているが、同時に、新大陸への関心が、一六三〇年代、ピューリタン・ジェントリの間で幅広く共有されたことを示唆するものでもある。ここで特筆すべきは、彼らが入植事業に参加することを通じて、他地域の指導者たちと知り合い、ピューリタン・ジェントリやピューリタン聖職者、さらにはロンドン商人をも巻き込んだネットワークに織り込まれたという事実である。[46]

このネットワークの中心にあったのが、一六二九年三月に国王から特許状を得て発足した「マサチュセッツ湾会社」であった。新興商人層の活動を追究したロバート・ブレナーの言葉を借りるならば、「マサチュセッツ湾会社は、アルミニウス主義者と不寛容な体制によるカルヴァン主義へのますます増長する脅威に対して、ロンドン市民や戦闘的聖職者、イースト・アングリアと西部地方出身の小ジェントリらが、イデオロギー的・政治的に反発したことによって特に組織されたことを意味した」[47]のである。

「イデオロギー的・政治的に反発した」多様な人々は、入植事業を通してお互いを知り合い、反対派のネットワークを形成していった。この事業において指導的な役割を果たしたのが、ウォリック伯（図7を参照）、セイ・アンド・シール卿、ブルック卿やナサニエル・リッチといったピューリタン貴族やピューリタン・ジェントリたちである。[48]彼らは、実際にアメリカに移住した人々、わけてもマサチュセッツ湾植民地の総督となったジョン・ウィンスロップや、植民地を代表する聖職者ジョン・コトンなどと強い絆で結ばれていた。さらに彼らは、「プロヴィデンス・アイルランド会社」設立に協力したり、セイ・アンド・シール卿とブルック卿を中心にしたコネティカットへの移民事業である「セイブルック計画」にも着手していった。[49]これらの入植事業は、ロンドンの新興商人層の利害を反映する経済的側面を有しているが、それにとどまらず、ピューリタン・ジェントリや聖職者の思惑と切り離せない政治的・宗教的特色をもっており、一六四〇年代の議会派や独立派に流れ込む人材を多数提供したことでも知られている。[50]

このようにピューリタン・ジェントリたちは、州を越えた諸活動を営み、聖職者や商人層とも協力関係を築き上げ、入植などの国際的な事業を通して革命期につながる人脈を形成していった。他方で見落としてならないのは、州内部でのピューリタン・ジェントリの影響力であろう。彼らは、州内部の教区民の動向に注意を怠らず、場合によっては、彼らの信仰生活に介入することすらあった。例えば、ヘリフォードシャのロバート・ハーリーは、地元の教区民の様子に留意し、彼＝「罪に対してもっともよく反応する熱血漢」を引き合いに出しながら、安息日を守るように説いている。

「彼は、神に向けられたすべての不名誉に反撃する、あらゆる精神を有している。彼は、悪事に対する抑圧者である。……他の事柄のなかでも、彼は、どのようにして安息日を軽蔑から擁護するのだろうか。冒瀆は、その表情に現れたりはしないものである。これに対して、教区集会が主の日にしばしば開催されて、罪深いスポーツ[51]に妨害されていた幾千人もの人々が説教を聞くことになった[52]」。

ハーリーは、「罪に対してもっともよく反応する熱血漢」を自分に重ね合わせて、教区民がスポーツなどの余暇に興じることがないよう、ピューリタン的なモラルを唱導したのである。ピューリタン・ジェントリによるモラル改革が、実際にどの程度まで効果を上げたかを速断することはできないが、中流階層以下の民衆に対して、ジェントリ層が様々な影響力を行使したことは確実である[53]。少なくとも、ヘリフォードシャにおいては、地域住民に対するハーリーの影響力は絶大であったようだ。その一端は、ロバート・ハーリーが一六五六年に亡くなったときの、葬送の説教において雄弁に示されている。

「彼は、後のあらゆる世代に語り継がれるべき、すべての偉人たちの模範であった。……彼は、この地域に福音をもたらした最初の人物であった。この地方は、彼が照らし始めるまでは、暗黒のベールに覆われていた。……彼は、敬神なる聖職者を導き入れ、彼の権威によって彼らを後援した。そうして、この世界の片隅に過ぎない小地域は、宗教的に有名に

なったのだ。……彼は、不動の原理原則をもつ人だった。宗教と確固たる改革は、彼が射抜いた金的のすべてであった」[54]。

この説教からは、ハーリーが、ピューリタン・ジェントリとして地域の民衆からも尊敬を集めた「名望家」であったことが伝わってくる。民衆の一部は、ピューリタニズムを自発的に信奉するようになり、ジェントリとの協力関係を取り結ぶことになるだろう。こうして彼らは、革命期にピューリタン・ジェントリとともに議会派の一翼を担うことになるのである。ピューリタン・ジェントリは、自らの階層を越える影響力を行使することによって、ピューリタニズムを基軸にした幅広い協調関係を創出するという役割を果たしたと考えられる。

以上のように、ピューリタン・ジェントリは、革命以前に、州外部でも州内部でも、利害関係をともにする人々の協力関係を形成していった。彼らは、州外部では、植民地への入植事業など国際的な活動によって、他地域のジェントリや聖職者、さらにはロンドン商人などとのネットワークを作り上げ、政府に不満をもつ人々との同盟関係を推進していった。他方で、州内部でも、彼らは、互恵的な支配＝従属関係を基軸にして、地域の住民たちに影響を及ぼし、ジェントリ層にとどまらない協力関係を創出していった。ピューリタン・ジェントリは、国際的で開放的なネットワークの結節点に位置し、州内部でも、地域の住民を動員できる指導的な役割を果たしたのである。こうしたピューリタン・ジェントリを中心にしたネットワークや人間関係は、一六四〇年秋に長期議会が開催され、四二年夏から内戦が勃発すると、必然的に、党派対立にも作用したことが予想されるのである。

五　おわりに

以上、ピューリタン・ジェントリという階層に焦点を絞って、それが初期ステュアート期から革命期にかけて、どのよ

うに形成され、どのような役割を担ったのかを検討してきた。そこで明らかになったことを、大きく三点に分けて、要約しておきたい。

まず第一に、ピューリタン・ジェントリは、一七世紀初頭に、ジェントリ層がピューリタニズムの影響を受けることによって盛んに形成されたものである。この時期、一方で経済的に力をつけてきた「高潔な」ジェントリがいて、他方で職にあぶれ「良心的な」保護者を求めるピューリタン聖職者が存在していた。その両者が、パトロン関係などによって結ばれたことによって、多くのピューリタン・ジェントリが成立したと言えるだろう。

第二に、ピューリタン・ジェントリたちは、一六二〇年代以降、聖職者や神学者の影響を受けて、千年王国論的な思想を表明することが多かった。チャールズ一世とロード派は、一六二〇年代末からピューリタン迫害を強化したが、ピューリタン・ジェントリは、千年王国論によって厳しい「受難」の時期を切り抜け、次の時代への確信をもつことができたように思われる。彼らの多くは、「キリストの王国」がイングランドのみならず、「西方の諸教会」にも及ぶと主張し、三十年戦争下にあるヨーロッパ大陸の情勢に深い関心を示した。この点からもわかるように、ピューリタン・ジェントリの思想は、イングランドに留まらない国際的な視野を有していたと考えられる。

第三に、ピューリタン・ジェントリは、革命に向かう一六三〇年代に、国際的なネットワークや開放的な協力関係を作り上げ、そうした関係の結節点に位置していた。彼らは、植民地への入植事業などを通して、他地域のジェントリやピューリタン聖職者、ロンドン商人などとのネットワークを形成して、政府に不満をもつ人々との協調関係を推進していった。同様のことは、州内部にも当てはまり、ピューリタン・ジェントリは、互恵的な支配＝従属関係に立脚しながら、地域住民に影響力を行使し、時として、ピューリタニズムを媒介とする協力関係を創出していったように思われる。彼らを中心にしたネットワークや人間関係は、革命前夜に反対派の人々にとっての拠点を準備したと言えるだろう。

このようにピューリタン・ジェントリは、初期ステュアート期から革命期にかけて、極めて重要な役割を果たしたと考えられる。従来の研究は、ピューリタニズムを受容したのがヨーマンで、アングリカニズムを受容したのがジェントリという二分法を採用することが多く、ピューリタン・ジェントリの重要性を看過することが往々にしてあった(図1を参照)。しかしながら、ピューリタン・ジェントリのもった意義を想起するならば、彼らを正当に評価できるような、宗教と階層に関する新しい概念や見取り図を提唱する必要があるだろう。言い換えれば、旧来の概念や見取り図では、ピューリタン・ジェントリのような存在の歴史的意義を、まっとうに位置付けることができないのである。

そこで最後に、旧来のものに代わる、宗教と階層に関する新しい概念や見取り図を、問題提起的に提出しておきたい。従来の二分法的な概念には、大きく言って三つの欠点が存在していた。その一番目が、本稿のテーマたるピューリタン・ジェントリを正当に評価できないという点であった。第二に、近年、J・モリルやA・フレッチャーによって研究されている「草の根のアングリカニズム」についても、従来の二分法は、その理解を妨げているだろう。民衆的グループがピューリタニズムを受容しやすいという従来の前提では、「草の根のアングリカニズム」という民衆とアングリカニズムの結び付きを十分に説明できないのである。しかし、一六四〇年代に国教会の共通祈禱書が禁止された後でも、依然として全国の三分の一以上の教区で祈禱書が用いられたという事実があり、地方の民衆がアングリカニズムに強い執着心を示したことは忘れてならない点であろう。[55]

第三に、一九八〇年前後からD・アンダーダウンらによって強調された中立派の存在も、従来の二分法では位置付けにくい問題である。西部地方を中心とした一六四〇年代のクラブメン運動などは、議会派にも国王派にも分類できず、ピューリタンにもアングリカンにも深く傾倒しない、中立的な民衆運動であった。彼らは、自らの生活を守ることを第一義とし、ローカリズムによって色濃く染められていた。[56] そうしたグループは、西部に限らず、イングランド全土で発見することが

できるだろう。

以上の欠点を克服するためには、少なくとも一七世紀前半に関しては、宗教と階層を重ね合わせる二分法を再考する必要がある。前提とすべきことは、一六世紀には、ピューリタニズムとアングリカニズムは、相互に重なり合う部分が多く、宗教上明確に区分できないものであったという点である。しかし、一七世紀になると、体制側によるピューリタン弾圧などによって、ピューリタニズムとアングリカニズムは次第に分極化するようになる。それでも一七世紀の人々が、ピューリタニズムを信奉するか、アングリカニズムにとどまるかは、血縁的な親族関係や地縁関係、また職能関係や地理的区分など様々な要因によって決定されたと考えるべきであろう。

さらに、ピューリタン・ジェントリに即して述べたように、他地域のジェントリやロンドン商人との間にネットワークを形成したり、地域の住民に多大な影響を及ぼしたりという、地域や階層を越えた宗教的・政治的・経済的な働きかけが作用したことも念頭におくべきである。アングリカンであるか、ピューリタンになるかの分岐は、複雑な要因の絡まりあいによって決まり、それでもなお、中立的な人々や信仰に関心のない人々が多数存在していたと言えるのである。

こうした点を考慮して作成した見取り図が、図2である。この見取り図は、州ごと、都市ごとの、いわばミクロ・レヴェルでの一体性や分裂性を正確に反映できないという難点があるが、一応、宗教と階層に関する、図1に代わる新しい概念を提示したものである。そこでは、ピューリタニズムとアングリカニズムが、それぞれ多様な階層によって受容されたという縦割りの構造が前提とされており、これに中立的な人々の存在を組み込んでいる。縦割りの構造を取らないならば、貴族・ジェントリからヨーマンなどの中流層にまで及ぶピューリタニズムの幅広い担い手が浮かび上がってこないのである。[57] 同様のことは、一七世紀初頭には確立していたアングリカニズムについても言える。アングリカニズムは国王や貴族、ジェントリに信奉されただけではなく、「草の根の民衆」にも受容されたのであった。

この見取り図は、一七世紀前半における宗教と階層との関係を概念化したものであるが、それが革命期における議会派と国王派の分裂と無関係であるとは、断言できないだろう。ピューリタンとアングリカンの対立が、多少なりとも議会派と国王派の分裂に影響していたことは、リチャード・バクスターの次の見解にも明示されている。「たしかに公的な安全と自由という問題が、多くの人々、特に議会に忠実な貴族やジェントリを強く動かしたことは認めなければならないが、議会軍に充満し、兵士たちに決断と勇気を与えたのは、主に宗教的問題に関する意見の相違であった。この点が、傭兵などとは異なって、兵士たちを突き動かしたのである」[58]。

だが、新しい見取り図が、なお未解決の問題をかかえていることは否定できない。例えば、「草の根のアングリカニズム」や中立派グループについて実証的な研究を重ねて、これらを見取り図のなかに矛盾なく位置付けるといった作業が残されているだろう。また、ピューリタンとアングリカンという宗教的な対立が、革命期の党派分裂にどのように作用し、影響を与えたのか否かという問題もある。これらの点の具体的な検討は、今後の課題としたい。

註

(1) M. Weber, "Die protestantische Ethik und der》Geist《des Kapitalismus", *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziolgie*, Bd. I, Tübingen, 1920, S. 20（大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫、一九八九年、一八～一九頁）.

(2) 前掲邦訳「訳者解説」三八五頁。『大塚久雄著作集　第八巻』（岩波書店、一九六九年）に収められた著作と論文も参照。

(3) 今関恒夫『ピューリタニズムと近代市民社会――リチャード・バクスター研究』（みすず書房、一九八九年）；梅津順一『近代経済人の宗教的根源――ヴェーバー、バクスター、スミス』（みすず書房、一九八九年）；常行敏夫『市民革命前夜のイギリス社会――ピューリタニズムの社会経済史』（岩波書店、一九九〇年）。この三著作については、岩井淳「ピューリタニズム研究の新展開」（『歴史学研究』六二九号、一九九二年）を参照されたい。

(4)越智武臣『近代英国の起源』(ミネルヴァ書房、一九六六年)、三頁。

(5)「再検討派」なる名称は、一九七一年の史学会大会・西洋史部会のシンポジウムを発展させた論文集、柴田三千雄・松浦高嶺編『近代イギリス史の再検討』(御茶の水書房、一九七二年)に由来する。

(6)岸田紀「絶対王政からピューリタン革命へ」(村岡健次・川北稔編『イギリス近代史』ミネルヴァ書房、一九八六年)、三七頁。

(7)「草の根のアングリカニズム」については、John Morrill and John Walter, "Order and Disorder in the English Revolution", in A. Fletcher and J. Stevenson (eds.), *Order and Disorder in Early Modern England*, Cambridge, 1985 ; J. Morrill, "The Church in England, 1642-49", in Morrill, *The Nature of the English Revolution*, Harlow, 1993 ; A. Fletcher, "Oliver Cromwell and the Godly Nation", in J. Morrill (ed.), *Oliver Cromwell and the English Revolution*, Harlow, 1990 を参照。

(8)筆者は、すでにクロムウェル研究との関連で「ピューリタン・ジェントリ」の重要性に論及しておいた。これについては、「オリヴァー・クロムウェル生誕四百年記念シンポジウム　クロムウェルと現代」(『聖学院大学総合研究所紀要』一七号、二〇〇〇年)、一五一頁を参照されたい。

(9)Christopher Hill, *Society and Puritanism in Pre-Revolutionay England*, London, 1964, p. 133. 他方、思想史の観点から、ピューリタニズムとジェントリ層の結び付きを先駆的に説いたものが、Michael Walzer, *The Revolution of the Saints*, Cambridge, Mass., 1965 である。ウォルザーの書物の研究史上の位置付けについては、岩井淳「ピューリタニズム研究の変遷」(『静岡大学人文論集』四二号、一九九二年)を参照されたい。

(10)Alan Everitt, *Suffolk and the Great Rebellion, 1640-60*, Leicester, 1960 ; do., *The Community of Kent and the Great Rebellion, 1640-60*, Leicester, 1966 ; do., *Change in the Provinces : the Seventeenth Century*, Leicester, 1969.

(11)Clive Holmes, *The Eastern Association in the English Civil War*, Cambridge, 1974 ; do., "The County Community in Stuart Historiography", *Journal of British Studies*, 19, 1980 ; A. Hughes, *Politics, Society and Civil War : Warwickshire, 1620-60*, Cambridge, 1987 ; do., "Local History and the Origins of the English Civil War", in R. Cust and A. Hughes (eds.), *Conflict in Early Stuart England*, London, 1989 ; do., *The Causes of the English Civil War*, Basingstoke, 1991, 2nd edn 1998 ; J. Eales, *Puritans and Roundheads : The Harleys of Brampton Bryan and the Outbreak of the English Civil War*, Cambridge, 1990.

(12)J. T. Cliffe, *The Puritan Gentry : The Great Puritan Families of Early Stuart England*, London, 1984 ; do., *Puritans in Conflict : The Puritan Gentry during and after the Civil Wars*, London, 1988 ; do., *The Puritan Gentry Besieged, 1650-1700*, London, 1993.

(13)今井宏『イギリス革命の政治過程』(未来社、一九八四年)、一八頁。

(14)野田宣雄『ドイツ教養市民層の歴史』(講談社学術文庫、一九九七年)、六九頁。また田中豊治氏も、ウェーバー研究の脈絡から「ピューリタン・ジェントルマン」の意義を次のように指摘している。「ウェーバーは、近世初頭、ピューリタニズムの広汎な浸透と影響のもとに『ピューリタン・ジェントルマン』が生まれ、そのことが後に、ジェントリの『近代的類型』の成立に深い影響を及ぼしたとみているのですが、特に、ピューリタン革命を惹き起こした指導層、これはジェントリ層に求められると彼は考えているようなのです。もちろん、特定の信仰と特定の社会層との親和的結合と言いますか『選択的親和性』という面で言えば、後になるほどジェントリはアングリカンになるわけです。ただ、ウェーバーによりますと変革期、激動期には、この社会層はこの教派という対応関係ではなくなりまして、つまり諸階層を縦断する縦割りになってくるのですね。そうすると、変革期にはピューリタニズムを熱烈に信奉するジェントリもいるし、あるいは部分的ないし例外的ながらアリストクラシーもそしてまた逆に下の方の層も含まれている。これは、内乱期を通じてイギリス革命においては、ジェントリに限らず、たえずあらゆる階層が両方の陣営に属している。こうした縦割りの状況で、対立が起きるのです」。前掲『聖学院大学総合研究所紀要』一七号、一七六〜一七七頁を参照。田中氏のこの指摘は、本稿の末尾で掲げる宗教と階層に関する筆者の提言と非常に類似したものである。

(15)E. W. Ives (ed.), *The English Revolution, 1600-60*, London, 1968, pp. 3-5〔越智武臣監訳『英国革命』ミネルヴァ書房、一九七四年、五〜八頁〕.

(16)*Ibid.*, p. 58〔邦訳 一〇六〜一〇七頁〕. 訳文は、必ずしも邦訳に拠っていない。以下同様。

(17)*Ibid.*, pp. 51-51〔邦訳 九五頁〕.

(18)アン・ヒューズは、初期ステュアート期に「生まれながらの指導者」と認められるには、「富と由緒正しい家系では不十分であった。熱心なプロテスタントであり『地方』の自由の擁護者と見なされることが、多くの州で必要であった」と述べている(A. Hughes, *The Causes of the English Civil War*, 2nd edn, p. 70)。このようにジェントリが「名望家」として尊敬されるには、経済力や家柄だけでなく、宗教に裏打ちされた威信が不可欠だったのであり、彼女は、多数のジェントリがピューリタニズムを受け入れた背景を示唆している。

(19)この点については、S. Adams, "Foreign Policy and Parliaments of 1621 and 1624", in Kevin Sharpe (ed.), *Faction and Parliament*, Oxford, 1978; 岩井淳「初期ステュアート期の外交政策と国際関係」(『静岡大学人文論集』五一号―一、二〇〇〇年)を参照されたい。

(20)この点については、G. F. Lytle and S. Orgel (eds.), *Patronage in the Renaissance*, Princeton, 1981〔有路雍子・成沢和子・舟木茂子訳『ルネサンスのパトロン制度』松柏社、二〇〇〇年〕を参照。

(21)*Ibid.*, pp. 82-83〔邦訳 一一四頁〕.

(22) *Ibid*., p. 103〔邦訳 一四〇頁〕.
(23) *Ibid*., p. 103〔邦訳 一四〇～一四一頁〕.
(24) Henry Burton, *A Censure of Simonie*, London, 1624, author's conclusion〔前掲邦訳 一三九頁〕.
(25) この点については、前掲拙稿「初期ステュアート期の外交政策と国際関係」を参照されたい。
(26) Cliffe, *The Puritan Gentry*, p. 197.
(27) *Ibid*., p. 195.
(28) ロード派については、Peter Lake, "Calvinism and the English Church, 1570-1635", *Past and Present*, 114, 1987 ; do., "The Laudian Style : Order, Uniformity and the Pursuit of Holiness in the 1630s" ; Anthony Milton, "The Church of England, Rome and the True Church" ; Nicholas Tyacke, "Archbishop Laud", all in K. Fincham (ed.), *The Early Stuart Church, 1603-42*, Basingstoke, 1993 を参照。
(29) 千年王国論や終末論については、W. M. Lamont, *Godly Rule : Politics and Religion, 1603-60*, London, 1969 ; J. F. Wilson, *Pulpit in Parliament*, Princeton, 1969 ; P. Toon (ed.), *Puritans, the Millennium and the Future of Israel*, Cambridge and London, 1970 ; T. Liu, *Discord in Zion : The Puritan Divines and the Puritan Revolution, 1640-60*, The Hague, 1973 ; 田村秀夫編『イギリス革命と千年王国』(同文舘、一九九〇年) ; 同編『千年王国論』(研究社、二〇〇〇年) ; 岩井淳『千年王国を夢みた革命――一七世紀英米のピューリタン』(講談社、一九九五年) を参照。
(30) ブライトマンとミードについては、P. Toon (ed.), *op. cit*., pp. 26-32, 56-61 ; 岩井淳『千年王国を夢みた革命』第一章を参照。研究動向については、岩井淳「ピューリタニズム研究の変遷」を参照されたい。
(31) Cliffe, *The Puritan Gentry*, p. 210.
(32) ヘリフォードシャのピューリタン・ジェントリ家族であるハーリー家については、J. Eales, *op. cit.* を参照。
(33) Cliffe, *The Puritan Gentry*, p. 209.
(34) *Ibid*., pp. 212-213.
(35) *Ibid*., p. 197.
(36) *Ibid*., p. 212.
(37) このジェイムズ・ハリントン (一六〇七～八〇年) は、『オシアナ共和国』を書いたジェイムズ・ハリントン (一六一一～七七年) の親族 (い

とこ）であり、両者は別人である。ハリントン家の系図については、淺沼和典『ハリントン物語』（人間の科学社、一九九六年）、二二頁を参照。

(38) Cliffe, *The Puritan Gentry*, p. 208.

(39) 例えば、ケント州やサフォーク州に即してジェントリを考察したエヴェリットは、一七世紀の地方社会の性格を「多様性」「孤立性」「連続性」といった概念によって特徴づけており（Alan Everitt, *Change in the Provinces*, pp. 6-15）、ジェントリについてもその保守的で一体的な性格を強調している。

(40) E. W. Ives (ed.), *op. cit.*, pp. 56-57〔邦訳 一〇四頁〕.

(41) ピューリタン革命前後のイングランドとアメリカ植民地をつなぐネットワークについては、J. F. Maclear, "New England and the Fifth Monarchy", *William and Mary Quarterly*, 3rd Ser., 32-2, 1975 ; D. Cressy, *Coming Over : Migration and Communication between England and New England in the Seventeenth Century*, Cambridge, 1987 ; F. J. Bremer, *Puritan Crisis : New England and the English Civil Wars, 1630-70*, New York and London, 1989 ; R. M. Bliss, *Revolution and Empire : English Politics and the American Colonies in the Seventeenth Century*, Manchester, 1990 ; 岩井淳『千年王国を夢みた革命』第二章などを参照。

(42) Cliffe, *The Puritan Gentry*, p. 201.

(43) *Ibid.*, p. 202.

(44) *Ibid.*, p. 203.

(45) *Ibid.*, p. 204.

(46) ここでの「ネットワーク」概念については、F. J. Bremer, *Congregational Communion : Clerical Friendship in the Anglo-American Puritan Community, 1610-92*, Boston, 1994, pp. 9-15 を参照。ブレマーは、新旧イングランドにまたがる、ケンブリッジ大学出身の聖職者を中心にした「ネットワーク」に注目しているが、本稿では、聖職者にジェントリや商人を加えた「ネットワーク」というものを想定している。

(47) R. Brenner, *Merchants and Revolution*, Princeton, 1993, p. 272.

(48) J. T. Peacey, "Seasonable Treatises : A Godly Project of the 1630s", *English Historical Review*, 452, 1998, pp. 668-669.

(49) *Ibid.*, p. 669 ; M. Tolmie, *The Triumph of the Saints*, Cambridge, 1977, p. 45〔大西晴樹・浜林正夫訳『ピューリタン革命の担い手たち』ヨルダン社、一九八三年、九四頁〕.

(50) M. Tolmie, *op. cit.*, pp. 106-107〔邦訳 二〇一頁〕; 大西晴樹「『市民革命』と『商業革命』」(岩井淳・指昭博編『イギリス史の新潮流』彩流社、二〇〇〇年) を参照。

(51) 「罪深いスポーツ」とは、一六一七年にジェイムズ一世が公布し、三三年にチャールズ一世が再公布した「スポーツ令」を意味している。この布告は、ピューリタンが週一回の安息日を遵守するよう主張したのに対して、ダンス、五月祭の遊び、モリス・ダンスなどを安息日に行なう「合法的な遊び」として奨励したものである。一六三三年の布告については、"The Declaration of Sports", in S. R. Gardiner (ed.), *Constitutional Documents of the Puritan Revolution, 1625-60*, 3rd edn, Oxford, 1906, pp. 99-103 を参照。

(52) Cliffe, *The Puritan Gentry*, p. 199.

(53) 教区民に対するピューリタニズムの影響を再検討したものに、Judith Maltby, "'By this Book': Parishioners, the Prayer Book and the Established Church", in K. Fincham (ed.), *op. cit.* がある。他方で、ピューリタニズムを受容した職人層については、Paul S. Seaver, *Wallington's World: A Puritan Artisan in Seventeenth Century London*, London, 1985 を参照。

(54) A. Fletcher, "Oliver Cromwell and the Godly Nation", p. 227.

(55) 「草の根のアングリカニズム」については、J. Morrill, "The Church in England, 1642-49"; A. Fletcher, "Oliver Cromwell and the Godly Nation"; 山田園子「クロムウェル教会体制への批判」(田村秀夫編『クロムウェルとイギリス革命』聖学院大学出版会、一九九九年) を参照。

(56) David Underdown, "The Chalk and the Cheese: Contrasts among the English Clubmen", *Past and Present*, 85, 1979; do., *Revel, Riot and Rebellion: Popular Politics and Culture in England, 1603-60*, Oxford, 1985.

(57) M・スパフォードも、革命前後の非国教徒を主たる対象にしながら、その構成員が、特定の階層に限られず、ジェントリから商工業者、職人に至るまで様々な階層に属していたことを論じて、階層縦断的な縦割り構造を提示している。この点については、M. Spufford, "The Importance of Religion in the Sixteenth and Seventeenth Centuries", Spufford (ed.), *The World of Rural Dissenters, 1520-1725*, Cambridge, 1995; M・スパフォード、大西晴樹訳「一六、一七世紀における宗教の重要性」(鵜川馨編『立教大学国際学術交流報告書』一三輯、一九九六年); 菅原秀二「民衆文化とその変容」(岩井・指編『イギリス史の新潮流』) を参照。

(58) R. Baxter, *The Autobiography of Richard Baxter*, London, 1931, p. 34.

(二〇〇〇年九月三〇日成稿)

＊本稿は、二〇〇〇年度の日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(B)(1)による研究成果の一部である。

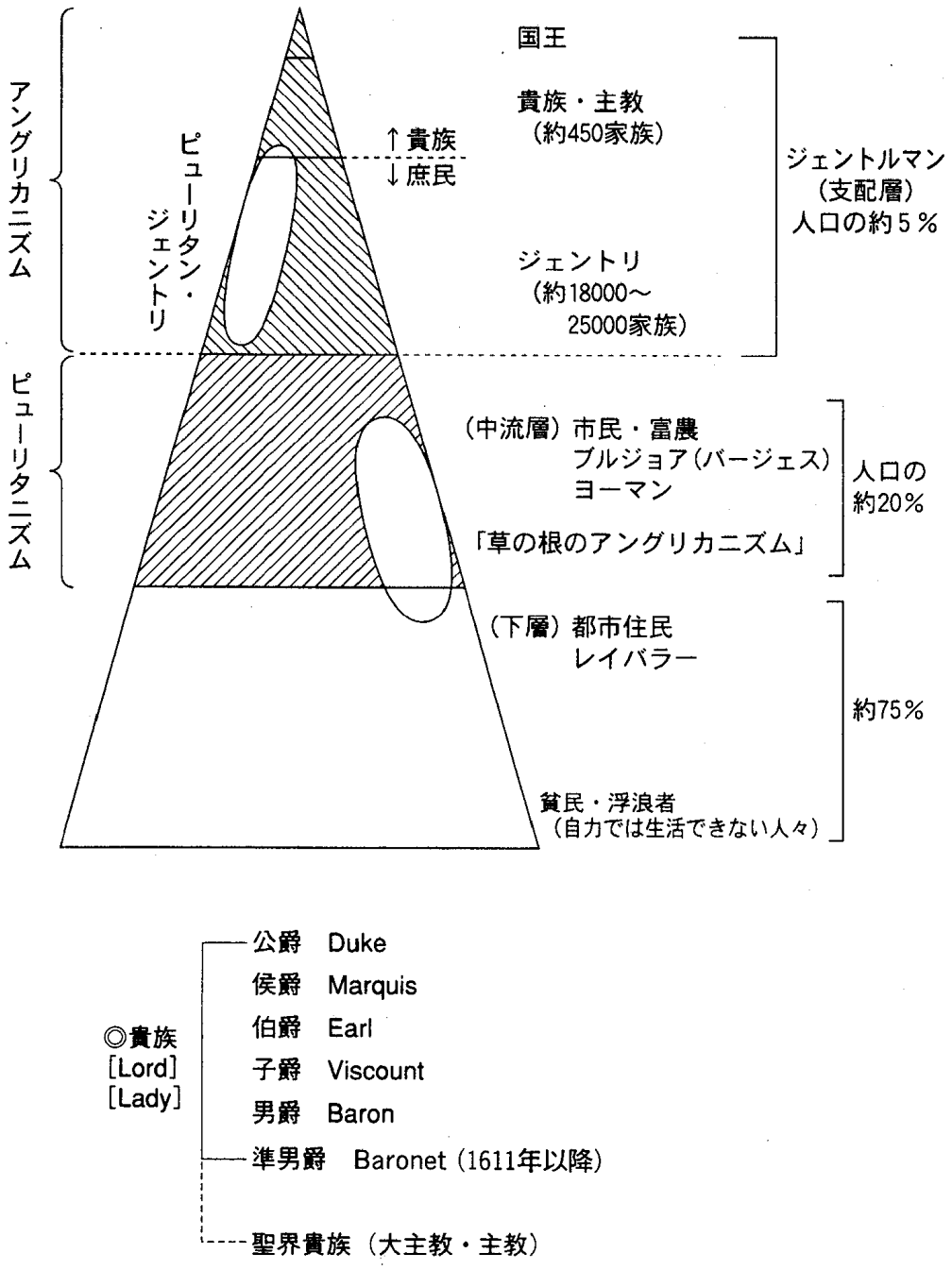
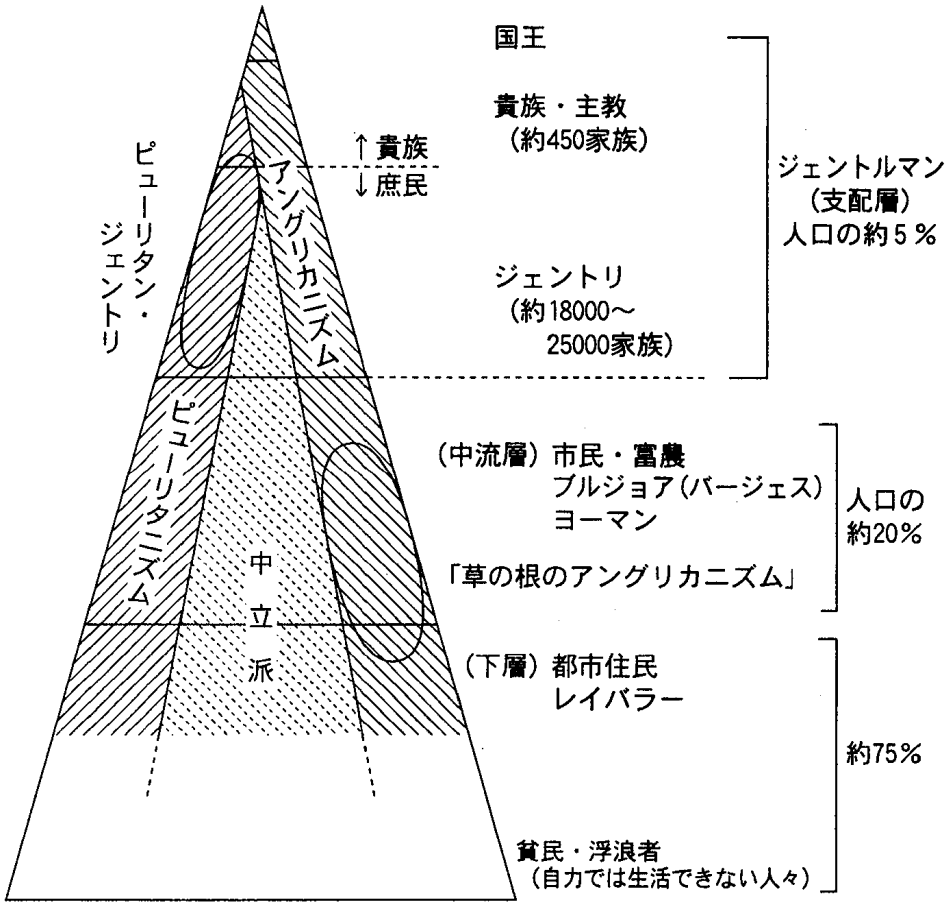


図１　イギリス史上の宗教と階層の関係を示した見取り図（従来の概念図）。出典：井野瀬久美恵編『イギリス文化史入門』（昭和堂、1994 年）30 頁の図を加工。



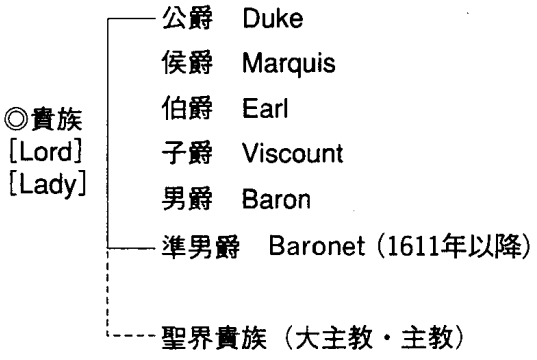


図２　17世紀前半の宗教と階層の関係を示した見取り図（新しい概念図）。
出典：井野瀬久美恵編『イギリス文化史入門』（昭和堂、1994 年）30 頁の図を加工。

階　　層	家族数	平均年収
貴　族	122	6,000ポンド
主　教	26	950ポンド
イングランド貴族の長男 スコットランドとアイルランドで貴族になったイングランド人および準男爵	305〜310	1,500ポンド
ナイト	1,500〜1,800	800ポンド
エスクワイア	7,000〜9,000	500ポンド
ジェントルマン（狭義）	10,000〜14,000	150ポンド

図3　初期ステュアート期の支配階層（1633年）。
出典：G.E. Aylmer, *The King's Servants: The Civil Service of Charles I, 1625-42,* New York, 1961, p. 331.

図4　イングランドとウェールズの諸州を示した地図。

出典：岩井淳『千年王国を夢みた革命』（講談社、1995年）4頁。

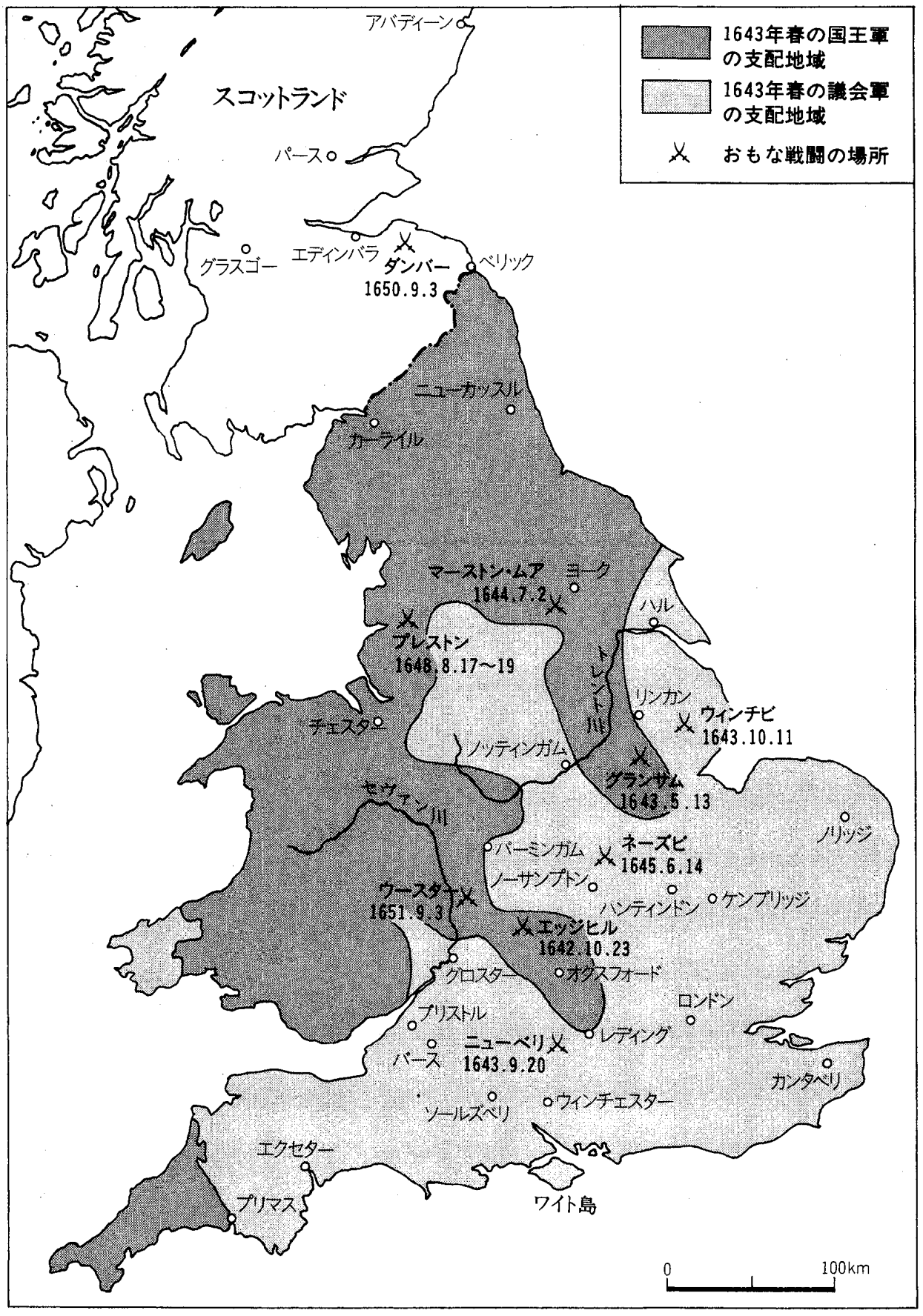


図5　ピューリタン革命期の国王派と議会派の勢力分布。
出典：川北稔編『新版世界各国史 11　イギリス史』(山川出版社、1998 年) 192 頁の地図を加工。

図6　ブリリアナ・ハーリー（1598？-1643年）の肖像画。
ブリリアナは、ヘリフォードシャのピューリタン・ジェントリ、ロバート・ハーリーの妻であり、敬虔なピューリタンとしても知られる。
出典：J.Eales, *Puritans and Roundheads : The Harleys of Brampton Bryan and the Outbreak of the* ***English Civil*** *War,* Cambridge, 1990, Jacket page.

図7　ウォリック伯ロバート・リッチ（1587-1658年）の肖像画。
ウォリック伯は、ピューリタン革命以前から政府を批判した貴族の代表的人物である。彼の息子はオリヴァ・クロムウェルの娘と結婚した。
出典：M.Ashley, *The English Civil War,* London, 1974, p. 44.